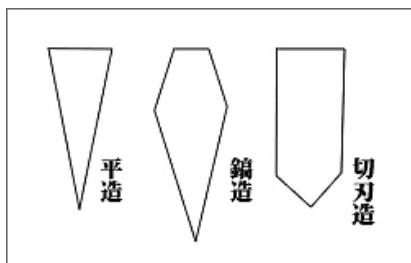


第2回 「^{ちよくとう}直刀から^{わんとう}彎刀の時代」

平安朝時代以前の上代の刀は直刀、つまり剣の様子は、

- ① 切り刃造りといわれる低い^{しのぎ}鑓の線が刃のごく近くに寄っている物。
- ② 鑓のない平造り（この造りは後代の短刀にもみられる）



- ③ 峯両刃造り（小鳥丸造り）



平安朝初期の刀は直刀方式を基本としており反りのある姿は一般的にあまり普及していませんでした。

中期に入ると京都を中心とした皇朝文化の花が咲き始め藤原氏を中心とした公家生活の気風に添うような体裁を主とした儀仗用あるいは衛府^{ゑいふ}の太刀として優美な姿恰好の良いものが要求されました。

刀匠たちも従来とはまるで違った優秀な鍛錬法（心鉄を入れよく鍛錬した皮鉄でこれを包む方法）を作りだし名実ともに日本刀が完成されたのです。

さらに直刀から太刀時代に移行した大きな理由は武家の戦闘方式の変化です。すなわち従来の個人的な徒歩戦から馬上戦へと変わり自然にこれに適合するよう刀身に反りのある太刀が要求されました。

後期に入ると太刀は現在の刀と同じく^{しのぎづくり}鑓造りの^{わんとう}彎刀となり美観だけでなく裁断の武器としては躍進の進歩をしました。

このころの太刀は馬上からの斬撃に反動を少なくするために鰐元で倒れるような腰反りで反対に物打ちより先は馬上からの刺突しやすいように無反りになっています。

太刀を長時間の戦いにも使いやすいうに軽量化を考えて鑓地は棟へかけて不要の重ねを削りにとって刀身の強度を増すとともに重量の軽減を計り、同様の目的から、元の身幅に比較して先身幅が極端に狭い踏ん張りの強い小峰の太刀姿になってきました。

長さは2尺5寸から7寸位が普通でしたが当時の馬は小形で馬体の大きさからすると馬上からの戦いには最も適した寸法であったと考えられます。



太刀 三日月宗近（国宝）

性能の良くなった刀は、このころから日本から中国や韓国への輸出が増えていきます。
たとえば平清盛も宋の皇室に日本刀を贈っていると鎌倉初期の九条兼実の著書「玉葉」にもみられます。
この時代に活躍した刀匠の作品は国宝級のものばかりで古典的な優麗さと品格の高さを備えていて後世の作品とは容易に見分けがつくものです。

当時代を代表する名匠の大略は次のとおりで作刀は全国に広まっていたのがわかります。

山城国：①三条系・・・宗近、吉家、有国

（京都）②五条系・・・兼永、国永

大和国：千手院系・・・行信、行吉

（奈良）

備前国：古備前系・・・友成、正恒、包平、助平

（岡山）

備中国：古青江系・・・安次、守次

（岡山）

伯耆国：伯耆系・・・安綱、真守、守綱

（鳥取西部～島根東部）

西国： 豊前国（大分）・・・神息、長円

（九州） 豊後国（大分）・・・僧定秀

筑前国（福岡）・・・良西

薩摩国(鹿児島)・・・波平正国、行安、行正

陸奥国：安房、雄安、森房、有正

（東北）

分責：松成初博

参考文献

日本刀の鑑定と観賞：金園社 常石英明

日本刀：岩波新書 本間順治

日本刀の歴史：金園社 常石英明

日本刀辞典：光芸出版 得能一男

古代の刀剣：吉川弘文館 小池信彦